
都市伝説の変遷

ん？ん？ん？ん！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

都市伝説の変遷

【Nコード】

N7443H

【作者名】

ん？ん？ん！！

【あらすじ】

あれから2年が経った。あまり思い出さくはないが、忘れる事も出来ない、ある【都市伝説】に纏わる事件から。3年生になった私は、ホラーサークルの部長をしている。何故そうしようと思ったのか、説明できるような理由はない。なんとなく、だった。ある日の夜、私に一通のメールが届いた。【助けて下さい】という題名のそれを、私は躊躇いながらも、開いてみる事にした。

1 2日前（放課後のやりとり）（前書き）

前書きです。

この【都市伝説の変遷】は、【夏のホラー2009】に参加させて頂いている、【都市伝説の起源】の続編です。ですので、【都市伝説の起源】を読み終えた後に読んで頂く事を、お勧めします。こちらから読んで頂いてももちろん構いませんが、意味の分からない文が出てきてしまうかもしれません。なるべくそうならないようにしますが、そうになってしまう可能性のある事を、ご了承下さい。

1 2日前（放課後のやりとり）

私は、少し憂鬱な気分を抱えたまま、部室のドアをがらりと開いた。

「あー！遅いですよ、片桐部長！！」

ドアを開けた私を、双葉ふたばの大きな声が迎えた。

「あーごめんごめん、日直だったのよ。」

私は疲れた様子を隠しもせず、そう答えた。この部に入って、まだ一週間しか経っていない双葉は、やる気が有り余っているらしい。やる気があるのは悪い事じゃないけど、ちよっとは控えて欲しい。

「えー！！昨日も一昨日も、その前もそう言ってますでした！？先輩何日連続で日直やるつもりなんですか！？よく分かりませんけど！！何かの新記録に挑戦中なんですか！？」

余りある元気を声に乗せて、捲くし立てる双葉。……しまった。今日こそは違う言い訳をしようと思っていたのに。

「まあまあ、そんなのどうでもいいじゃない？てか、まだ部活始まつてないわよ？ほら——」

私の指差した時計は、4時35分を指していた。部活の開始は5時からだ。

「そんなの関係ないですよ！！早く部活を始めましょう！！」

そう言いながら、双葉が私の腕を引っ張り、席に座らせようとする。どう考えても、関係ない事はないだろう。

「待つて待つて、引っ張らないで、裾が伸びる裾が伸びる。という

かね、まだあんたと瀬戸君しか来てないじゃない。他の二人は？」

「私は知りません!!」

知らない事を元氣よく報告する双葉。その無駄な元氣を少し私にも分けて欲しい。

「瀬戸君は、何か聞いてる？」

私と双葉のやり取りを、我関せずといった様子で見ていた瀬戸に、話を振る。瀬戸は、双葉と同じクラスだった筈だ。双葉が知らないのなら、きっと彼も知らないのだろう。そう思ったが、私はあえて話を振った。

「伊井田先輩は、今日はパス」だそうです。堂間は、昼休みに姿を見かけたので、サボリじゃなければもうすぐ来ると思いますよ。」が、私の予想とは反して、右手で眼鏡を直しながら、瀬戸はそう答えた。

「えー!!伊井田先輩サボリですかー!!!福部長がいなかったら部活始まらないじゃないですか!!」

「伊井田抜きで部活なんて、日常茶飯事でしょ。全然問題ないって。」

「えー!!そうなんですか!?伊井田先輩って、サボリ魔なんですか!?!初耳です!!」

「……ああ、そういえば、あんたが部活に入ってから、伊井田の奴やけに出席率良かったわね。それまで毎日のように休んでいたのに。」

「伊井田先輩は、双葉の事が好きなんだよ。」

瀬戸君が、何でも無いようにそう言った。いや、普通に考えてそれはないだろう。だって伊井田は……

「え！？ええ！？そんな！？困ります！！副部長の事は嫌いじゃないですけど！！でも！！それはそういうんじゃない！！」

伊井田がその場にいる訳でも無いのに、うるたえまくる双葉。ちょっとは落ち着けないのだろうか。

「ちよつと落ち着きなつて、双葉。そんな訳ないでしょ、また瀬戸君お得意の悪い冗談よ。」

「いえ！！あの！！やぶさかではないというか！！いえしかしやはり困ります！！」

双葉は、私の言葉に少しも耳を貸さない。何をそんなに慌てているのか。伊井田がこの場にいるならまだしも。責めるような視線を瀬戸に向けるが、瀬戸はにたりと笑ったまま、止めようとしない。

とその時、がらりと部室のドアが開いた。

「すみません遅れましたー、って、どうしたんですか？」

別にまだ遅れてはいないのに、律儀にも謝りながら入室した堂間に、私が簡単に事情を説明する。堂間はふむふむと聞いていたが、話を聞き終わると、双葉の肩に手を置いて言った。

「お前はアホか。変な本の読みすぎじゃないのか？」

そう彼に言われ、双葉の混乱がようやく収まる。この部の中では彼が一番双葉の扱いに手馴れている。

ようやく騒ぎが収まった所で、騒ぎのある意味中心となった――

伊井田——彼女抜きの部活が始まった。

2 2日前（風呂あがりのひと時）

「ん~~~~~ん」

お風呂あがり、私はベッドに寝転がり、思いつきり伸びをした。そしてその後、全身の力という力を抜き去る。今日一日の疲れが、いい感じに取れていく。ああ、いい気持ち。明日の宿題も終わってる事だし、今日はこのまま寝ちゃおうかな。

それにしても、私は何でホラーサークルなんて作ったのだろう。うとうとしながら、そんな事を考える。今まで何度も何度も自問自答して、結局答えが出せない問題だ。いや、本当は最初から分かっているのかもしれない。悩むまでもなく、答えとは言えないかもしれないけど、自分なりの回答のようなものを。私はきっと、思っているのだ。昔の自分を取り戻したい、と。

「……………」

少し目が覚めて来てしまった。私は、2年前のあの事件の後、物事をどこか冷めた目で見えるようになってしまった。何を見ても何を聞いても何に触れても、どこかリアルさに欠けている。

「……………香織」

居なくなってしまった親友の事を思う。どうせなら、私も全てを忘れてしまえば楽だったのに。

「うーやめようやめよう!!」

もう悩むのは止めようと、私はまた虚しい決意をする。どうせ直ぐに、また思い出してしまう事になるのだ。私はそういう性格なのだから。それでも、今は全力で別の事を考える。

今日の部活は、何をしたんだったかな。ああそうだ、【こっくりさん】についてだ。まあ、何も新しい発見などなかった。第一、部長である私のやる気がないのだ。伊井田もあんな調子だし、双葉のやる気もいつまで続くものやら。双葉が居なかつたら、実質今日も、くだらないお喋りだけで終わっていた。

「……………ホラーサークル、か。」

昔の事を思い出してしまったからだろうか、私は部のメンバーについて思いを巡らせた。

双葉。一番最近入った一年生。元気すぎる子。今日一日の疲労の半分くらいは、彼女に持っていていかれたような気がする。

瀬戸。多分、いや絶対彼は性格悪いわね。先輩である私と伊井田に対して、一応敬語は使っているけど、誠意が全く感じられない。まあある意味では、そういう子の方が我が部に相応しいのかもしれないけれど。

伊井田。私の同級生。クラスは違うけど、以前から割りと仲は良かった。私が部を作りたいと言った時、協力してくれたのも彼女だし、ちよつと部活をサボりすぎなような気もするけど、やる気のない私が責めるというのも、何か悪い気がする。

堂間。……………。堂間部長の弟さん、か。いや、弟だった人、かな。今は堂間部長は居なかつた事になってるから。念の為に本人にも聞いてみたけど、一人っ子です、って言われたし。二人して怖い話が好きななんて、やっぱり兄弟なのかな。

ピロピロピロピロ

漫然と思考を捏ね繰り回していた私を、聞き慣れない音が現実へと引き戻す。その音は、私の携帯から鳴っていた。こんな音、聞いた事がない。

少しだけ嫌な気分になりながら、差出人を見る。見た事もないアドレスだった。

タイトルには、「助けて下さい」と書かれている。

「……………」

私は、複雑な気分を覚えたが、取り合えず本文を読んでみる事にした。

3 2日前（メールの内容）

「私は、北西高校に通っている、伊藤要いとうかなめと言います。私は、文芸部に所属しているのですが、一昨日学校で百物語の真似事をしました。途中までは何も起こらずに楽しんでたのですが、友達の一人が、カルタに纏わる話を始めてから様子がおかしくなってしまうたのです」

そこまで読んで、私は一度メールの本文から目を離した。北西高校と言えば、すぐ近くじゃないか。私の通う南東高校なんとうの姉妹校だった筈だ。それにしても、カルタに纏わる話って……。いやそんなまさか。嫌な予感が外れればいいのに、と願いながら続きを読む。

「様子がおかしくなると言うのは、目に見えて何かがおかしくなったという事ではありません。そういうものではなく、その場の空気が急に引き締まったような。そんな感じでした。私は靈感とかそういうのは無いと思うのですが、そんな私でも寒気を覚えました。話が終わると友人は机の上に一冊の本と、トランプのようなものを出しながら言いました。「今の話は、この本に載っていた話を少しアレンジしたもののんだけど。なんと、問題のカルタを実際に見つけてしまいました」と」

私が2年前に書いた話は、【本当には無かった怖い話】というタイトルの投稿小説に載った。掲載許可の確認電話が来た時は戸惑ったけれど、そんな変なタイトルの本、誰も好き好んで読まないだろうと思って許可したのだ。そういえば、2年前に使ったカルタはどうなったのだろう。香織が持って帰ったと思うんだけど……。まさかこのメールのカルタが

本物なんて事はないよね。

「話の中で出てきたように、そのカルタには読み札がなく、気持ちの悪い絵札だけでした。そしてあろう事か、小説に書かれているように実際にそのカルタを使ってみようという話になったのです。私は反対したのですが、他のみんなはやけに乗り気で、結局押し切られるように私も一枚を選んで引きました。その札には、血で染まった服が書かれていました。友達の意見によるとその札は【赤いちやんちゃんこ】みたいです。」

読み札が無いだけでは、本物がどうかなんて判断できない。出来ないのだが、携帯を持つ私の手の平は、じつとりと汗ばんで来ている。

「その後も何事も無く話が進んで、解散になったのですが、どうしても嫌な予感が拭い切れず、私は友達に頼んで本を貸してもらいました。その本を読み終えた私は、怖くて怖くてたまらないので、こうしてメールしています。どうか私を助けて下さい。」

……これで、終わり？

疑問がいくつかあるが、一番にして最大の疑問は、「何故私のメールアドレスを知っているのか？」という事だ。北西高校の友達が、この人に教えたのかもしれないけど、それにしても伊藤要なんて名前、聞いた事がない。悪戯メールの可能性も有るには有るが、それにしては内容がピンポイント過ぎる気がする。助けてと言われてもなあと思いつながら画面を見ると、まだスクロールバーが下りきっていない事に気付く。まだ続きがあるらしい。

「080 - XXXX - XXXX」

この人の電話番号だろうか。言っちゃ悪いけど、どうも気味が悪い。

……かといって、何もしないというのも出来ない。カルタの真偽だ
けでも確かめておきたかった。北西高校の友達に、伊藤要という人
物についてもう少し詳しく聞いてから、電話してみよう。

気付けばもう1時を過ぎている。友達への電話は明日にして、今日
はもう寝る事にした。

4 2日前（就寝前）

「……………ん」

眠い。私は目を擦りながら、パソコンの画面を見ていた。もしもカルタが本物だった場合、少しでも早く対応した方がいい。伊藤さんがまだ生きていればいいのだが。そう思うのなら、実際に電話してみればいいだろうけど、そうしないのは、怖いからだった。正直もうあのカルタには、かわりたく無かった。

「【赤いちゃんちゃんこ】、と」

黙っていると怖いので、私は声に出しながら、伊藤さんが引いたという都市伝説について検索する。かわりたく無いのに、こうして調べているのは、私がどうしようもなくお人好しだからだろう。すぐに電話をしないあたり、それはただの自己満足なのかもしれないけど。

ずず、と眠気覚ましに入れて来たコーヒーを啜りながら、【赤いちゃんちゃんこ】について書かれたページに目を通していく。

「んー、学校の七不思議の一つに入る事が多くて……………トイレの霊の一つで……………赤いちゃんちゃんこ着せましょか、が口癖みたいなもの……………霊になった原因は、いじめられたから？……………殺された死体は、首を切られて自分の血で赤いちゃんちゃんこを着たように見える……………うーん。やっぱり改めて見てみるまでも無かったかな」
改めてみるまでもなく、ほとんど知っている情報ばかりだった。

「……………これは、やっぱり」

確認して、確信が持てた。この都市伝説から助かるのは簡単だ。「

赤いちゃんちゃんこ着せましょか？」と聞かれたら「そんなものは着ない」とはつきり答えればいい。それより何より、学校の女子トイレの、一番奥の個室に近付かなければいい。

いくらなんでも、この時間には伊藤さんも家で眠っている筈だし、何より私が限界だ。

メールするにしろ、電話するにしろ、私は明日へ判断を先延ばしして、今度こそ寝る事にした。

5 1日前（通学路）

「行つて来ます」

「あら美穂、どうしたの？今日はやけに早いのね」

「うん、ちよつと今日は約束があるんだ」

適当に適等な言い訳を、母さんに対して返し、私はいつもより早めに家を出た。学校へと歩きながら、北西高校に通う友人に電話を掛けた。

ぶるる、ぶるる、

という呼び出し音が続く。一向に出る気配がない。

「……………」

おかしいな。いくらあの子でも、さすがに起きてる時間だと思うんだけど。仕方ない、後から掛け直そうと、電話を切りかけた私の耳に、友人の眠そうな声が響いてきた。

「……………」 あーい、もしもーし、誰ですかー？」

今起きたらしい。……………いくらなんでも遅すぎじゃない？

「おはよう、もう8時30分よ」

「え”！？しまった！！寝坊した！！……………ていうかその声まさか美穂なの？」

「うん、久しぶり」

「久しぶり久しぶりー。元気してたー？」

「まあまあ、ね。良くも悪くもないかな」

「ふーんまあまあかー。変わってないわねーその微妙な言い回しが好きな所」

「それはいいでしょ、私の癖なんだから。貴方はどうなのよ？」

「えー私もまーまー」

「ちょっと何よそれー」

あはは、と二人して少しの間笑う。電話したのは約2ヶ月ぶりだけど、そんな事を感じさせないのが、この子のいい所だった。そして私が、電話する相手に彼女を選んだのにはもう一つ理由がある。

「それで？どうしたの？」

この切り替えの早さだ。他の子ならこうはいかないだろう。こういうのもなんだけど、ほとんど意味のない話を後30分くらい続ける必要がある。別にお喋りが嫌いな訳じゃないけれど、今はそういう気分じゃない。

「ん、あなたが学校に遅れてもいけないから、手短に言っわ。聞きたいことがあるの」

「うん、何？」

「伊藤要って、どういう子？」

「いとうかなめ？」

疑問系で聞き返された。もしかして、知らないのか？まあそれも仕方ないか、私だって同じ学校の子の名前を全員知ってる訳じゃない。私は、最悪の事態を振り払って考えた。最悪の事態とはもちろん、昨日あの後に殺されていて、存在が消えている場合だ。

「いとう……いとう……」

「あ、知らないならいいのよ」

「あー!!」

「知ってるの？」

「あーうん。どうしたの、興味あるの？」

どうやら、最悪の事態には陥ってないらしい。ひとまず安心だ。それにしても興味があるとは妙な表現だ。

「うん、まあ、そう、かな」

自分でも煮え切らない返事になってしまふ。どうなんだろう。この場合、興味があるという表現でいいのかな。

「へー、そうなんだ。へー、美穂がねえ」

？さっきからなんだこの反応は。

「それで、どんな子なの？」

「それよりさ！―どういう所がいいの！？」

.....
まさか、この反応は。

「あの、さ。伊藤要って、男の子なの？もしかして」

「何であんたが聞くのよ！！興味があるから聞いて来たんでしょ？」
「やっぱりか。それにしても、男の子だったとは。どうする？このまま興味がある振りを続けて聞きだそうか。んーでもなあ。妙な噂がたつても困るしなあ。うーん。」

「.....あのね、誤解してるようだけど、別に好きとかじゃないわよ？」

「えー！？じゃあ何で！？」

まあ当然こうなるか。

「.....それは言えないんだけどね」

「あー！！もうこんな時間！！遅れちゃうー！！」

「あ、待って、切らないで。伊藤君はどういう人なの？」

「えー私もあんまり話した事無いから分からないよ。彼無口だから。シャイってやつ？まあ顔はそんなに悪くないから、美穂が好きになるのも分からはないけど」

「ちょ、だから違うって！！」

「はいはい、まあいいんじゃない？悪い人では無いと思うわよ。また今度詳しく聞かせてね。なんなら私が紹介してあげてもいいわよ。ああ遅れるーじゃあね」

「あー！！待っ――」

て、と言いたかったのだが、その前に切れてしまった。

「.....はあ」

情報を得れたのは良かったのだが、変な誤解も招いてしまった。

6 1日前（ホームルーム直前）

「……………うーん」

いつもより少し早く教室に着いた私は、ホームルーム前のざわざわした教室の中で、一人悩んでいた。

まさか、伊藤要が男の子だったとは。本当だったら今私は、この開いた時間を利用して、「伊藤さん」に電話している筈だった。別に私は、男の子に電話を掛ける事が出来ないような、気持ちが悪いほどにピュアなオンナノコでは、あいにく無いのだけれど。

……………逃げ、だなあ。

私は、男の子だったからという理由で、電話しない事にしようとしている。きっと、伊藤要なる人物が女の子だったとしても、それ以外の理由をこじつけて、電話を掛けていないのだろう。

「——さん、片桐さん」

電話を掛けるか掛けまいか、揺れ続ける私は、私に対して呼びかける委員長の声聞いた。何だろう。クラスの雑用だろうか。それならばちょうどいい。時間を潰せ——違う、また逃げ道を見つけようとしている。

「どうしたの、委員長？」

「貴方の事と呼んでるわよ？」

「私を？」

誰だろうか。

「うん、ほら、前側のドアのとこ」

委員長の言う方向を見ると、そこには萎縮している双葉がいた。三年生の教室は、居心地が悪いのだろう。

「ありがと」

と言に残し、双葉の元へ向かった。

「あ、先輩」

ほっとしたように双葉が言う。

「どうしたの？珍しい」

「あの、今日の放課後付き合って欲しいんですけど」

今日の放課後は、特に予定はない……………今の所は。

「何処に？」

「北西高校です」

「……………何で？」

「あの、私の友達のお兄さんが、昨日から何かに怯えてるみたいで、その相談に乗りたいんです」

伊藤要の名前が浮かぶ。でも、ちょっと待って欲しい。

「……………なんで私が？私が付いて行く事に何か意味があるの？それ」

「え？あの？あれー？先輩も呼んで欲しいって名指しで言われたから、てつきり知り合いなんだと思ってました。……………違うんですか？」

「……………もしかして、そのお兄さんの名前、伊藤要っていう？」

「あー！やっぱ知り合いなんじゃないですかー！」

キンコンカンコン

と、ホームルームの開始を告げる鐘が鳴る。

「じゃー！今日の放課後お願いしますねー！」

「あー！ちょっと待ってー！」

急いで教室に戻ろうとする双葉を、私はつい呼び止めた。

「何ですか？」

何だろう。疑問がありすぎて、何を聞けばいいのかわからない。私はあのカルタから離れたいのに、向こうから寄って来てるみたいで

気持ち悪い。

「……………あ。と、今日の部活休みにするから、他の一年生に伝えておいて」

「了解です」

それだけ言つと、たっ、たっ、たっ、と軽快なステップで、双葉は走っていった。

7 1日前（北西高校への道）

「先輩！！やっぱり私思うんですよー！！」

双葉の元気な声が、住宅街に響く。本当に、何でこの子はこんなに元気なのだろう。

「…何をよ」

私たちは、授業が終わった後直ぐに、北西高校に向けて出発した。私の中では、行かない方がいいのではないかと、未だに悩む自分がいる。双葉の手前、なかなか言い出せないのだが。

「部として認められる為にも！！もっと真面目に活動した方がいいと思うんですよ！！片桐部長！！」

部長という部分をやけに強調して、双葉は言う。

「別に……………今のままでもいいんじゃない？」

「駄目ですよ！！」

「何で？」

「えっ！？えーと、それは、……………部費とか」

「部費なんて要らないでしょ？それに、もう私たちとは別に、ちゃんとした「文芸部」があるんだから、元からそんなの無理なのよ」

「そんな事ないです！！文芸部なんて大した事ないんです！！」

……………。

……………あー、なるほど。文芸部の子に、馬鹿にされたって事ね、これは多分。私や伊井田はそういうのはあっさり受け流すタイプなんだけど、双葉はそうでは無いらしい。

「それで私決めました！！都市伝説を調べてみます！！」

「……話の繋がりが見えないんだけど？なんで「それで」になるの？」

表面上は冷静に答えたが、私の心はざわついていた。何で？何で双葉は急にそんな事を言うのだろうか。このタイミングで。

「部長がやる気がないのは、怖い話に餓えてるからじゃないかと思っただんです！だから、新しい怖い話を――」

「待つて待つて――！都市伝説イコール怖い話じゃないでしょ。それに私がやる気がないのは――」

言葉につまる。それを双葉に言う訳にはいかなかった。

「やる気がないのは！？ちゃんと理由を教えて下さい――！納得できる理由を――」

「……都市伝説に限らず、怖い話には余り深く関わらない方がいいのよ。怖い話が出るのには、それなりの理由があるんだから。

火の無いところに煙は立たないし、君子は危うきに近付かないの。」

「納得できません――！意味が分かりません――！それならなんで部長は、ホラーサークルなんて作ったんですか――？」

「それは……ほら、もう着いたから。その話は後でね」

「あ――！部長――！」

後ろから追いかけてくる双葉から逃げるように、私は伊藤要と待ち合わせてあるファミレスに入った。

8 1日前（ファミリーレストラン）

店に入ると、よく冷えた空気が全身を包んだ。体中の汗が引いていく。……クーラーが利きすぎだ。今はいいけど、すぐに寒くなりそう。後ろから追いついて来た双葉が「あーすずし」と満足気な声を出している。

「先輩！！ちゃんと後で理由聞かせてもらいますからね！！」

「……………気が向いたらね」

「気が向いたらって先輩！！」

「それよりも、伊藤君はどの子なの？」

「え？私は知りませんよ？」

知らないのか。まあ、そんな気はしていたが。

店内を見回す。学校帰りに寄る子が多いのか、北西高校の制服を着た子が意外と多い。うーん、ここを待ち合わせに選んだのは失敗だったかも。

しばらく二人して、店内を見回してみるがよく分からない。私たちは左右を見回しながら、テーブルの間を歩いた。

「あ、あの人じゃないですか？」

双葉の指差す先に、男の子が一人で座っていた。そこは店の一番奥まった場所で、入り口の部分からは見えない場所だったから、気付かなかったのだ。男の子は俯いていて、いかにも何かに怯えている様子だった。

「あなたが伊藤……要君？」

私が呼びかけると、伊藤君と思われる男の子はびくつと顔を上げた。「あ、ああ。そうです。片桐さんですか？」

中性的な雰囲気を出す男の子は、やはり伊藤君だった。心なし

か顔が青い。なんだか気の毒になってくる。

「そうよ」

私の返事を聞き、伊藤君はあからさまにホツとした表情を浮かべる。私に何が出来る訳じゃないのに、そんな顔をされても困る。

「あ、どうぞ掛けて下さい。えーと……遠藤^{えんどう}さんも」

「私の事は双葉って呼んで下さい、そっちの方が慣れてますから」
伊藤君の正面、私の隣りに腰を下ろしながら、双葉が言った。

その途端びくつ、と伊藤君が何かに怯えるように反応する。双葉っという言葉に何かトラウマがあるのか？でもそれってどんなトラウマだろう。双葉も不思議そうにしている。

「どうしたの？」

「いえ、片桐さんならもしかしてと思ったんですが、やっぱり聞こえませんか」

「……………何が？」

「あの、しよっぱなからこんな事を言って引かれると思うんですけど、今日の話の確信でもあるんで言います。あの、僕、昨日カードを引いてから定期的に聞こえるんです」

伊藤君は、そこでぐくりと生唾を飲み込んだ。元からそういうつもりで来ているので、どんな幻聴を聞いていようが私が引く事はない。双葉も多分引かないだろう。そんな性格の子じゃない筈だ。それでも伊藤君はいい難そうだった。

「何が聞こえるの？」

「「赤いちゃんちゃんこ着せましょかあ」、って声が、です」

私が助け舟を出すと、伊藤君は震えながらそう言った。

9 1日前（赤いちゃんちゃんこ上）

「先輩、本当にあれでよかったんですか？」

伊藤君の話を一通り聞いた私は、とにかく女子トイレに近付かない事と、今度声が聞こえたら「赤いちゃんちゃんこなんて着ない」という事をはっきりと伝える事を言い含めて、その場を後にした。

「……………あれ以外に何かする事があった？」

双葉からみたら、私は少し冷たい人間に見えているかもしれない。いや、見えているだろう。

「いえそれは……………でもせめて、もう一度幻聴が聞こえて、伊藤君が「赤いちゃんちゃんこを着ない」事を伝えるまで一緒にいてあげればよかったんじゃないですか？」

「いつ聞こえるかも分からない幻聴を待ってればよかったって言うの？ 今日一日伊藤君と過ごせばよかったの？」

「……………そういう訳じゃ」

「じゃあどういう訳なの？ 貴方が言っているのはそういう事でしょー！？」

「……………すみません」

双葉はそれで一応引き下がったものの、今日の先輩怖いです、と私に聞こえるかどうかの声で呟いた。

いつも元気な双葉がしゅんとしてしまったのを見て、私の心は少しぶれかけたが、ここは心を鬼にする。

このカルタは本当に危険なのだ。私はポケットに手を入れ、双葉がトイレにいつている間に伊藤君から預かったカルタを握り締めた。双葉を巻き込む訳にはいかない。

「それじゃ、私の家こっちだから。双葉はあっちだったわよね」

「あ、はい。今日は付き合ってもらってありがとうございました。
また明日学校で。」

「うん、じゃあ」

いつもより心なし元気の無い双葉の後ろ姿が完全に見えなくなつてから、私は携帯を取り出した。

昨日のメールに書いてあった、伊藤君の番号を押す。自分で自分の馬鹿さ加減に嫌気が差す。何で私はこんなにお人よしなんだろう。少しかわいそうだが、伊藤君なんて放っておけばいいのに。どうせもうすぐ居なくなる人間なのに。

数回の呼び出し音の後、伊藤君の怯えたような声が聞こえる。

「はい」

「伊藤君？」

「そうですけど……えっと、誰ですか？」

「片桐よ」

「よかった！僕もう不安で不安で！何か分かりましたか？」

「さっきの今じゃない、何も分かってないわ」

「……そうですか」

気落ちしたような声。精神的に追い詰められているのだから多少は仕方ないとは思うけど、情けない。もう少ししっかりして欲しいものだ。

「それで？あれから幻聴はあったの？」

「いえ」

「……そう。一つだけ貴方に聞き忘れた事があるの」

聞き忘れたというより、隣りに双葉がいたから意図的に聞かなかったのだが。

「何ですか？」

「貴方たちのうちの誰かが、【都市伝説の起源】と書かれたカードを引かなかった？」

「……………いえ、いませんでした」

少しの沈黙の後、彼はきつぱりと答えた。

私にとっては、この答えは意外だった。どういう事なの？それなら観測者がいないから、怪異は起こらないんじゃないのか？

「……………これは私の憶測に過ぎないから、あんまり期待して欲しくはないんだけど、もしかしたら今回のカルタでは誰も死なないで済むのかもしれないわ」

私のこの発言は、彼にとっては唐突だっただろう。

「本当ですか!？」

「いや、あくまで予想よ」

「あの、その予想がどこから来るのか、聞かせてもらってもいいですか？」

予想とはいえ、始めて希望らしきものが見えたのだ。少し、ほんの少しだけ明るい声になって、伊藤君が聞いてきた。

「誰かが死んでしまう怖い話ってというのは、観測者が必要だからよ」

「どういう事ですか？」

「つまり、小説を読んでくれたのなら分かると思うけど、前回の場合は私が観測者だった。でも今回はその観測者がいないでしょ？」

「……………それは、何の解決にもならない気がします」

あれ？私なりに励ましていたつもりだったのに、伊藤君はとても暗い声を出した。

「ど、どうして？」

「確かに、あなたの時は観測者が必要だったかもしれませんが。でも今回はそんな人必要ないんじゃないですか？だって、もう都市伝説は完成してしまっているんですから、あなたの手によって。それに何より僕の場合は、あなたがその観測者に成り得る」

「そ、そんな事無いわ」

そう言ったものの、彼の言った事も分かる。

「あ、あああ」

急に彼が怯え始める。まさか。

「もしかしてまた聞こえるの？」

「うつつ」

「そうなのね！？すっかりして！！言うのよ！！」「赤いちゃんちゃんこなんて着ない」って！！」

「うつつ、僕は【赤いちゃんちゃんこなんて着たくない】！！」

よし。ちゃんと言ってくれた。これで大丈夫な筈。しかし私の予想とは反して、伊藤君の悲痛な声が聞こえてきた。

「着ないよ！！着ないって言うてるだろ！！いやだ！！もうどっか行ってくれよ！！僕はそんなもの着たくないんだ！！」

ばしゅ、という音の後に、ごっ、と大きな音が響いた。

う。嫌な想像をしてしまう。

「伊藤君！？伊藤君！？ちよつと！！返事をして！！」

必死に呼びかけるが、返事がない。まさか、まさか。

「伊藤君！？伊藤君！？」

それでもしつこく呼びかけると、携帯の向こうから、小さく声が聞こえた。

「……………あ？」

よかった。なんて言ってるかは分からないけど、とにかくよかった。きつと転んで携帯をおとししてしまったとか、そういう事よね。

「伊藤君！？大丈夫なの！？」

「……………あ？」

「聞こえないわ！？頭を打ったの！？大丈夫なの！？」

「……………う、き……………あ？」

ぎくりとした。さっきまでは小声すぎて聞こえなかったが、声が伊

藤君のものとは全然違う。

「…………伊藤君？」

「赤いちゃんちゃんこ、着せましょかあ？」

「きゃあー!!」

さすがに、二年前と違って気絶するような事はなかったが、私は情けない声を出して携帯を取り落としてしまった。慌てて拾い直すが、落とした拍子に、携帯が切れてしまった。急いで掛けなおそうとする私の耳に、どこからか声が届く。

「赤いちゃんちゃんこ着せましょかあ？」

「え？」

どこから聞こえたのだろうか？頭の中に直接響いてきたような感じだった。

……………気のせいよね。

「赤いちゃんちゃんこ着せましょかあ？」

先ほどよりも大きな声が、響く。やはり気のせいではない。まさか、まさか、カードを持っているせい？そのせいで、私まで標的になってしまったというの？

落ち着け、落ち着くのを私。都市伝説には、必ず対処法がある。

思い出すのよ、【赤いちゃんちゃんこ】に対処する方法を。

10 1日前（赤いちゃんちゃんこ中）

【赤いちゃんちゃんこ】への対処方を考えながら、私は2年前の事を思い出していた。【ひきこさん】に襲われた時の事を。

香織や他のみんなは、怪異から逃れる事は出来なかった。けど、霊斗先輩だけは【ひきこさん】に襲われたにも関わらず生き延びている。それは何故か。それは、怪異に対する知識が、人一倍あったからだ。あの時は動転していて霊斗先輩が何をしているのか分からなかったが、小説を書くに当たって調べてみると、霊斗先輩は【ひきこさん】に対して、少なくとも二つの対処法を知っていた事になる。【引く張るぞ】と3度言う事と、【ひきこさん】をいじめた人間の名前を知っていた事だ。もっとも、名前を知っていた事は厳密には対処法じゃない。【ひきこさん】は、いじめを苦に怪異になったのだが、いじめられたのは怪異となった今でもまだトラウマとして残っている。だから、いじめた人間と同じ名前の人間は襲わない。いや、襲えないのだ。……………何故、霊斗先輩がいじめっ子の名前を知っていたのかは分からないけど。

とにかく、対処方を間違えなければ、生き残れる筈だ。そういえば、【赤いちゃんちゃんこ】もいじめられた少女が原型だったのでは無かったか？「ちゃんちゃんこを着ない」と言う宣言が駄目だとすると、その辺りに生き残りの可能性があるような気がする。

私は、自分がこれほど冷静に思考できている事に驚いていた。霊的な現象に慣れたという事もあるが、きっとそれは私の心境の変化だろう。2年前、私は何もできなかった。そのせいでみんな死んでしまった。もうこれ以上、このカルタに関する事で、犠牲者を出したくない。

「……………ぐ!?」
体にいきなり衝撃が走ったかと思うと、私の体は、指先まで固まってしまった。

……………そんな。また、だ。【ひきこさん】の時と同じ。

がらがら、と急に大きな音が背後で響いた。今まで何の気配も感じなかったのに、急に背中にぞくぞくするような圧迫感を感じた。ずず、ずず、と何かを引きずるような音を立てながら、その何かは近付いてくる。

「赤いちゃんちゃんこ着せましょかあ?」

背後から、またあの声が、今度は直接私の耳に聞こえてくる。

「着ない!!……………!?私は着ないわ!!」

どういつ訳か口だけは動く。私は必死に着ない事を訴える。体が動かない今、出来る事をしなければ。

「赤いちゃんちゃんこ着せましょかあ?」

私の声など意にも掛けず、ずず、ずず、という音は、私の背後までたどり着いた。

いやっ!!何?見えないから、余計に恐怖感が高まる。

「赤いちゃんちゃんこ着せましょかあ?」

「着ない!!着ないわっ!!」

落ち着いて対処しようと思っていたのに、やっぱり無理だった。私はすっかり恐怖に支配され、叫んでいた。

ずず、ずず、背後の気配はさらに前進し、私の横を通り抜けた。少しうつむきがちなその顔は、長い髪で覆い隠され、表情が伺えない。

両手で、血塗れの大きな鎌を引きずっている。

「……………うう」

恐怖で声が引きつる。あんなもので首を跳ねられたらひとたまりもない。

「赤いちゃんちゃんこ着せましょかあ」

「着ないって！！！！言ってるでしょう！！！！」

ありったけの声を振り絞り叫ぶが、女はゆるりと鎌を振り上げた。そして、長い髪の間隙からぎよろりとした目を覗かせながら私の顔を覗き込む。

気持ちの悪い笑みを貼り付けたまま、女は一言一言確認するように言う。

「赤いちゃんちゃんこ着せましょかあ」

「着ない！！着ないわ！！嫌よ！！着ないわ！！」

何で？何で？何で私の話を聞いてくれないの？

女は、振り上げた鎌を、私の首目掛けてゆっくりと振り下ろした。

11 1日前（赤いちゃんちゃんこー下）

走馬灯、というのは、死ぬ間に思考が加速して、通常では有り得ない程の量の物事を考えられるようになる事だ。と何かの本で読んだ気がする。普段使われていない脳の部分を用いる事で、たった数秒の間にいままでの一生を振り返る事が出来ると。

目の前の女は、長い髪の隙間から、ぎょろりとした目を心なし嬉しそうに歪めている。私の首に向かって降りてくる鎌の動きが、やけにゆっくりに感じる。

首を切られて死ぬというのは、どれぐらい痛いんだろう。毒などでじわじわと苦しみながら死ぬのよりは楽なのかもしれない。でもやっぱり死ぬのは嫌だな。あんまり痛くないといいけど。それよりも何よりも、私の生きた証が、何もかも消えてしまうという事の方が嫌かもしれない。ああ何やってるんだろう私、せっかくの時間をこんなにもくだらない思考に使うなんて。まあそれも私らしいのかもしれない。言ってみれば、2年前のあの日から私は半分死んでいたようなものなのだから。

「……………あきらめるなよ」

ぐい、と懐かしい声とともに、私の体が後ろに引かれた。私の首があった部分を、びゅんと豪快な音を立てながら鎌が通っていく。その途端、麻痺していた恐怖心が蘇った。

「れ、れ、霊斗先輩！！？」

「先輩はよしてくれないか。もう俺は片桐の先輩じゃないんだからな。それよりも、片桐はもっと強いと思ってただけだな」

どっ、どっ、と自分の心臓の音がやけに大きく聞こえる。死に掛けたのだ。私はもう少しで死んでいたのだ。回らないろれつのまま、私は必死に声を出す。

「っ、強い？」

霊斗先輩は、どす黒い色のちゃんちゃんこを着た女から視線をはずさないまま答える。

「精神的にだよ。2年前俺を助けてくれただろ？それとももう忘れたか？」

覚えている。もちろん覚えている。【ひきこさん】に霊斗先輩が連れ去られそうになっているのを見た私は、出なかった筈の声を絞り出した。でもあんなの助けた内に入るのだろうか。どちらかと言うと邪魔をしてしまったような気もするのだが。

「い、いえ、でも」

「お前がどう思っているのか分からないけど、あの時声を出してくれた事によって、間違いなく俺は助かったんだ。……………それなのに、情けないな。どうした片桐？なにのまれそうになってるんだ？」

「のまれる、ですか？」

「そうだよ。お前今、別にもう死んでもいいやとか思っただろ？」

「そんな、事は」

「無いのか？」

「……………いえ」

「しつかりしろよ。……………ほら、そろそろ来るぞ」

霊斗先輩が僅かに身構える。豪快にからぶりした女が、体格に不釣り合いな程大きな鎌をゆらゆらと構え直した。

ぎょろりとした目は、私をしとめ損なった事を悔しがるどころか、獲物が増えた事を喜ぶようだった。

「赤いちゃんちゃんこ、着せましょかあ」

再び鎌を振り下ろしてくるが、その動きはやはり緩慢としている。

恐怖心が消えたと同時に、体を縛っていた力も消えていた。私はそれを楽々と後ろにかわす事ができた。霊斗先輩が隣りにいるからだろうか？

かわしたのはいいが、今度は別の事実によつて、私の体は再び固まった。髪の毛の間から見えた女の顔に、見覚えがあつたからだ。いやしかし、そんな筈はない、私の見間違えにちがいない。だって、だって。そんな。

「さ……………斉藤先輩？」

私の言葉に、斉藤先輩に似ている女はぴく、と反応した。まさか？嘘でしょ？そんな事ある訳がない。

「……………赤いちゃんちゃんこ、着せましかあ？」

女は、そう言つたあと、髪をかきあげると、その顔を露にした。すつかりこけてしまつているが、それは確かに斉藤先輩だつた。

「そ、そ、そんな！！何で！？嘘よ！！？」

じりじりと後ずさりする私をじつと見据えて、にいつ、と女は笑う。私をかばうように、霊斗先輩が前に立つてくれる。

「……………また、来るわね」

しばらく睨み合いが続いたが、赤いちゃんちゃんこの女はそう言つと、踵を返し、ずつ、ずつ、と血まみれの鎌を引きずりながら行つてしまつた。

12 1日前（リビング）

私は、そろそろそろと落ち着かないまま、携帯メールを打つ手を止め、霊斗先輩を盗み見る。

霊斗先輩は、私の机に座って、【赤いちゃんちゃんこ】の絵が書かれた例のカルタを眺めている。表の絵だけでなく、裏やふちなど、角度を変えて観察していた。

それにしても情けない。何を動揺しているのか。本当に私は、何を動揺しているのだろうか。

「あ、あの、何か飲み物いりますか？」

沈黙に耐え切れず、声を掛ける。だから、何をつかえているのよ私。沈黙を気まずいと思っているのが私だけらしいというのも何だか嫌だった。

「ああ、ありがとう。でも気にしないでいい」

「いえ、私入れて来ます。お茶でいいですか？」

「そうか？なら頼むよ」

「はい」

ドアを出ると、私は一つ大きく息をはいた。

……………情けない。ああ情けない情けない。何を变に意識しているんだろう私。気持ちを切り替えなきゃ。

確かに落ち着いて話をした所だったけど、何で私の部屋なんだろう。いや、まあ嫌ではないんだけど。……きつと、霊斗先輩は本来居ない筈の人だから、あまり人に見られたくないのだろう。

とす、とす、と間抜けな足音が階段に響く。ああ何か今日は疲れたな。

「あら美穂？帰ってたの？」

「えあー！母さんこそ！？」

「はあ？何変な声出してんのよ」

「……………まさか母さんが帰ってたなんて。どうしよう、霊斗先輩が部屋にいるのに。」

「な、何でもないわよ」

「そう？あ、今日母さん高校の同窓会だから、戸締りよろしく頼むわよ」

「えー！！えー？そうなの！？」

「……………あんた、本当に変よ。何か隠してるんじゃないでしょうね？」

「……………別に。同窓会、楽しんで来てね」

私は、何気ないふつを装いながら、リビングへ向かった。

母さんの事だから、私が無言を隠しているのはばれているのだろうけど、それが何かまではきつと気付かれないだろう。

13 1日前（自室）

「どうやら本物みたいだな」

「分かるんですか？」

「ああ、ここに蜘蛛のマークがあるだろ？」

霊斗先輩の指差す部分を見ると、カルタの裏の模様に上手く隠されているが、見逃してしまいそうな程の大きさだが、確かに蜘蛛のマークがある。

「確かにありますけど……このマークがどうしたんですか？」

「多分忘れてると思うんだが、俺たちが巻き込まれた『都市伝説カルタ』の仕掛け人は、このマークを好んで使うんだ。このマークにどういう意味があるのかまでは、まだ分からないんだけどな」

「覚えてます。確か露天商から買ったって香織が」

小説を書く時に、その部分は必死に思い出して書いたから、多分間違いない筈だ。霊斗先輩は、その私の返答を聞いて、ほう、と少し感心したような表情になった。何故か私は少し嬉しくなった。

「そうだ。そいつが作った作品には、だいたいこのマークがついている。例えばほら——」

霊斗先輩は、どこからか鏡を取り出して、模様の入っている部分を指差した。なるほどそこには、綺麗な金色で、蜘蛛の模様が入っていた。

「——他にもこういうのもあるぞ」

今度は、シャボンダマを取り出す。吹く部分が、蜘蛛の形になっていた。

「こんな感じで、蜘蛛の模様が入っている。まあ本来これだけでは判断できないんだが、さっきの道路での事からして、間違いないだろう。まさかあの大鎌女が人間のわけないしな」

「……………やっぱりアレは、斉藤先輩なんですか？」

「どうだろうな。確かにアイツは、お前の声に反応したみたいだが、それは演技だったかもしれない」

「演技？」

「そうだ。怪異っていうのは、基本的に生きてる人間が嫉ましいものなんだ」

「嫉ましいから、引き込もうとする？」

「ああ、だから、お前をあっちの世界に連れて行くために、わざわざあの姿で現れたのかもしれない。でもまあ——」

霊斗先輩は、少し顔を伏せ、

「——あれは、本物の斉藤だろうなあ」

どこか寂しそうにそう続けた。さすがに2年前まで同級生だった人間が、怪異になっているのは抵抗があるのかもしれない。

「ところでさ、片桐」

「はい？」

「このカルタはどこで見つけたんだ？」

そう言えば、まだその事を説明していなかった。私は、伊藤要に関する事を昨日の夜から一通り説明した。霊斗先輩は、時折相槌を打ちながら聞いていた。

「……………なるほど」

私が話し終わると、霊斗先輩は短くそう言った。

「となると近々このカルタに関する怪異が起こりそうだな」

「え？もう起こってるんじゃないですか？北西高校で」

「違うよ。今度は南東高校で、だ」

「な！！そんな！！どうしてですか！！」

「コレを見てみる」

そう言つて、霊斗先輩が差し出したのは、伊藤君から受け取った【赤いちゃんちゃんこ】の絵が書かれたカルタ、の筈だったのだが。

「……………え？せ、せんぱい？……………コレ」

本来絵が書かれている筈の部分に、【そろそろ死ね】という文字が書かれていた。

え？え？どういう事？

「おそらく、「もうお前は必要ないぞ」って事だろう。【都市伝説カルタ】の噂も、ネットロアとして広まりつつある事だし」

霊斗先輩は冷静に分析する。

「いやっ！！」

おもわず、霊斗先輩の手からカルタを叩き落とす。

「あ、ごめんなさい」

「いやいいよ。それよりそんなに慌てるな。お前は俺が守ってやるから」

「は。え？っな！？」

慌てて私は霊斗先輩に背を向ける。顔が熱い。この人はなんて事を言うのだろうか。私は、よくある表現でいうなら顔から火が出そうだった。煙くらいは出てるかもしれない。まあ、面と向かってこんな事を言われたのだから、ある程度は仕方ないのではないだろうか？いやきつとしようがないだろう。

「どうした？」

と、霊斗先輩の何でもないような声が背後から聞こえてくる。本当に分かっていないのか、それとも分かっている私をからかっているのか、確認する方法が無かったが、私は背中を向けたまま「なんでもありません」と答えた。

14 まがりばり

「ちーっす。来てやったぞー」

間の抜けた声を出しながら、伊井田が部室に入って来た。来るのが当然なのに、来てやったと言う所が彼女らしいと言えば、彼女らしい。そして私は、彼女のそういうルーズな所が嫌いではなかった。

「あー！伊井田先輩！！こんにちは！！」

元気よく挨拶する双葉。私が部室に入った時に、昨日の伊藤君の事を聞かれるんじゃないかと思っていたが、何も触れられなかった。きつと昨日伊藤君は、電話の向こうで存在を消されてしまったのだろう。——斉藤先輩によって。それにしても、存在を消されたのなら何故私はその事を覚えているのだろう。2年前の事は私は当事者だから覚えているのは当然としても、今回の事を覚えているのは少し変ではないか？という疑問を持ったのだが、それについては霊斗先輩が、「カードのせいだろう。……念の為に聞いておくが、その双葉とかいう女の子には触らせていないな？」と答えを出してくれた。

「おお双葉。今日も元気だなあ。あ、そうだ堂間、この前借りたCDだけでもうちよつと借りててもいい？」

双葉の頭を撫でながら——おとといの瀬戸の冗談、あながち全くの冗談という訳でもないのかもしれない——伊井田は堂間君に話しかけた。

「いいですよ。パソコンにデータを残してあるので聞こうと思えばいつでも聞けますし」

堂間君は、鉛筆の動きを止めて答える。宿題でもしているのだろうか。伊井田と堂間君は仲がいい。伊井田が適当なのに対して、堂間

君は真面目なイメージが強いから、私は未だに少し違和感があった。

「珍しいっすね、先輩が来るなんて。やっぱり双葉がいるからなんすか？」

瀬戸も会話に加わった。

「今日は水曜日だからね」

伊井田は、よく分からない答えを返した。伊井田のその言葉を聞いて私は少し思い出してみるが、伊井田が水曜日に好んで部室に来るという事実はなかった。

「…………… どういう事？ というかあんた、今日学校休みなんじゃないかな？ 一度も姿を見かけなかったけど」

私も会話に加わる事にした。

「そりゃそうよ、今学校に来たんだから」

さも当然だ、というように答える伊井田。と言う事は何か？ 伊井田は今日部活に出る為だけに学校に来たという事か？ …… 雨でも降るんじゃないだろうか。

「そろそろ出席日数危ないんじゃないの？」

「まあ、大丈夫じゃない？」

何がどういう風に大丈夫なのだろうか。

「…………… 何かたくらんでる？」

「ひどいなあ美穂ったら。気分よ、気分。この部的な感じで言うなら【虫のしらせ】ってやつよね。第六感？」

それが悪い虫で無ければいいのだが。

「第六感ねえ、ま、いいけど。卒業は出来るようにしなよ」

「へいへい。ところでさ、あの人は誰なの？ 見た事ないんだけど、先生？ ではないよね、若いし。入部希望者か？」

伊井田が、奥の椅子に腰掛けている霊斗先輩に気付いた。私は、ポケットから針を取り出し、慎重にそれを伊井田の手に刺した。もう

4回目とは言えやはり緊張する。霊斗先輩いわく痛みは無いらしいけど、人に針を刺すというのにはやはり罪悪感を覚える。

気付かれないように針をポケットに戻し、私はとぼけた声を出した。「何言ってるのよ伊井田。そんなに若いのにボケたら洒落にならないわよ？霊斗君は前から私たちの部にいたじゃない」

「……………そう、だったわね。私寝すぎでぼーっとしてたみたい」

伊井田は少し首を捻ったが、すぐにその曲がった事実を受け入れた。やはり凄いなあ、この【曲針】は。霊斗先輩が露天商から取り返したものの一つらしいけど。針を刺しただけで人の記憶を曲げられるなんて。

それにしても、霊斗先輩の事を「霊斗くん」というのは凄く抵抗がある。というか恥ずかしい。でもこれは霊斗先輩の指示だった。同級生が先輩というのはおかしい、と。まあそう言われればそうなんだけど、恥ずかしいものは恥ずかしい。

伊井田の反応を確認し、針が利いている事を確認した私は、霊斗先輩へと視線を向けた。

霊斗先輩が大きく一つ頷くのを見て、私は

「全員そろったし、部活を始めるわよ」と宣言した。

15 7不思議の7番目

「どうしたんすか、今日やけにやる気っすねー」

私の宣言に対して、瀬戸がそう茶化した。見事に出鼻をくじかれた感じだった。

「何よ！！やる気があるのはいい事じゃない！！先輩！！やっと本気になってくれたんですね！！やっぱり文芸部なんかに負けてられませんよね！！」

瀬戸の言葉に対して、何故か双葉が対抗する。

「ん。せっかく私を援護してくれた双葉には悪いのだけど、別に本気になったという訳でもないのだが。……文芸部のくだりが出てくるという事は、昨日一緒に北西高校に向かった記憶はあるという事なのだろうか？存在が消えるというのは、どこまで影響があるのかいまいち計りきれない。」

「ん、どうした双葉？また文芸部のやつに何か言われたのか？」

「そうなんですよー、伊井田先輩！！あいつら本当に酷いんですよ！！私たちの部活なんて必要ないって！！」

「何だ双葉、お前まだそんな事言ってるのか？いい加減慣れるよ」

伊井田と双葉の会話に、堂間君までもが加わる。……部活を始めると言ってるのに。みんな好き勝手に喋り過ぎだ。ま、別に構わないけど。本当の所、私は別に部活などやりたくないのだから。

「慣れる！？慣れられないわよ！！何で部長も堂間君も、そうやって冷めてるのよ！！ねえ伊井田先輩！？」

「え？ん、んん？まあ、ね」

伊井田も、双葉が言うところの冷めている側なのだが、双葉の勢いに負け、同意している。

「あのさあ、双葉、お前小学生かよ」

ついに瀬戸まで本格的に会話に加わりだした。

「何ですって!？」

「だからそれだよ。そんな直ぐムキになんたって。堂間も困ってるだろ？」

「困ってないわよ!!ね!!堂間君!!」

「ん?.....うん」

明らかに狼狽している堂間君。しかし双葉はそんな事に気付かないようだ。

「くくく、ほらまた困らせてる」

その様子を見て、瀬戸は嬉しそうに笑っている。

「何よ!!」

その態度を受けて、双葉がヒートアップし始めた。いよいよ部活どころでは無くなって来ている。

「おいお前らー、部長が困ってるだろ」

そのぐだぐだの流れを引き戻したのは、以外にも伊井田だった。双葉を宥めると、話の主導権を私に返してくれる。……本当に雨、どころか雪が降るんじゃないだろうか。

「えーと、まあ別にそんな静まり返られても困るんだけどね」

「ちなみに、今日は何をするんですか？」

堂間君が聞いてきたが、特に何をするか決めている訳じゃない。

「いつも通りよ、誰か議論したい話題か何かあるかしら？」

「【学校の七不思議】とかどうですか!？」

双葉が元気よく発言した。

「それはつまらんげ、小学生さん」

瀬戸がまたしても煽るように言う。

「小学生じゃないわよ!!」

「分かってるよ。軽い冗談じゃないか。それに、そんなありきたり

なもん、今更話し合ってもつまんねーだろ？なあ堂間？」

「まあな。でも繰り返し議論する事によって、新たな発見があるかもしれない。……どう思いますか、伊井田先輩？」

「私はどっちでもいいわ。部長に任せる」

伊井田が私に丸投げしてきた。やれやれ、どうしようか。

「まあ確かに今更感はあるけど、双葉がどうしてもというなら、今日はそれでもいいと思うけど。どう？」

「私はただ、七個目の不思議の、『七不思議の七個目を知ると呪われる』というのをもう少し詳しく調べて見たかったんです」

「ん、それは俺も興味あるぞ。呪われるなんて穏やかじゃないけど」堂間君も同調する。それなら、今日はそのテーマでもいいかもしれない。

「あー、ちよつといいすか、先輩」

急に瀬戸が遠慮がちに割り込んだ。私は、別に拒否する理由もないので、発言を許可する。そもそも許可など必要ないのだけれど。

「俺からも一つ提案があるんですけど、今日はコレをやってみませんか？」

そう言いながら、トランプのようなものを取り出す瀬戸。

私はもう分かっていた。それは「トランプのようなもの」ではなく、まさしく『都市伝説カルタ』だ。

何故瀬戸がそれを持っているかとか、そんな野暮な事はもう考えま
い。なるべくしてそうだったのだ。見えない力に引き寄せられるよ
うに。

私は、今日伊井田がふいに顔を出した時から、こつなるような気が
していたのだから。

16 完成に足りないもの

瀬戸がカルタを手に入れた経緯や使用方法について、双葉、堂間、伊井田に時折質問を入れられながら、自慢げに話しているのを聞き流しながら、私は霊斗先輩に小声で話しかけた。

「霊斗先輩」

先輩は、私の方をじとりと見て、非難するような声色でこたえた。

「……………先輩は止めると言ってるだろ？年の差は気にしないでいいと、何回も言ってるだろ？俺はそんなの気にしないって」

「私が気にするんです」

「……………これも何度も言ってるが、変に使い分けしていると、そのうち混乱するぞ？」

「大丈夫です。私そこまで不器用じゃありません」

「そういう問題じゃないんだけどな。例えば今のこの会話だって、部の連中に聞かれたら困るだろう？」

「今は瀬戸の話にみんな夢中になってます。私たちの話なんか誰も聞いてません。」

「……………まあ、いい。それでどうした？瀬戸の話の聞かなくていいのか？」

「どうせ、2年前の焼き直しだから、聞く必要ありません」

「ふうん。片桐も分かってきたみたいだな。怪異が、都市伝説がどういうものか」

「亜種が生まれたりもするけど、基本的な話の流れは一本道だって事ですよね」

「そうだな。【赤紙・青紙】などの古いものは、いろいろストーリーが分かれたりもするが、この都市伝説は生まれてまだ二年しか経ってない。おおよそ前回同様に進行すると考えていいだろう」

「やっぱり、そうなんだ。私の考えは間違っていなかった。耳を傾けると、瀬戸は露天商から買ったという事を、やはり自慢げに話して

いる。

「それが分かっているんなら、どうしてお前が狙われるかも、分かるんじゃないか？」

「私が狙われる理由ですか？………いえ、その、分かりません」

「なんだ、分からないのか。このカルタの都市伝説は、お前が死ぬ事で始めて完成するからだ」

「私が死ぬ事で？」

「お前が死ねば——まあ、例外として俺が居るんだが——この都市伝説を直接知る人間は居なくなるからな。ネット上の噂は、噂として確立する。友達の友達。都市伝説の完成だ」

「………なるほど」

言われてみれば納得だけど。やっぱ理不尽だった。せつかく生き残ったのに、否、生かされただけなのか。

「だから、そんな顔をするなって。………そろそろ始まるみたいだぞ」

霊斗先輩に促されてみんなの方を見ると、瀬戸君が自分で考えた（と思っている）ルールを説明し、カードを裏向きに並べている所だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443h/>

都市伝説の変遷

2010年10月11日02時04分発行